

論 說

鋪裝道路の急設

田川大吉郎

時局に照し種々の方面の制限、擴張、刷新、改善の必要が訴へられ計畫せられつゝある間の特に考慮を加へられたい一緊要事として私はこゝに鋪裝道路の擴延とその促進とを唱へる。

尤も、その必要なこと、急要なことは、専門のお方には、夙くより分り切つて居る。道路鋪裝の必要と題する貴改良會にて御發行のパンフレットは、私も拜受して一讀した。私は、それに賛成の意向を表示すれば足る。又、たゞ、それだけの心持にて、本論を草するのであつて、乃ち、専門のお方や、斯道の關係者

を除き、其餘の一般の方々に向つて申上げ、相共に省察し、盡瘁せばやと思ふに過ぎない。

私は、最近滿洲を旅行して、彼地に於ての鋪裝道路の一斑を視ることが出来た。その指導計畫者たる直木博士とは、多年熟識の間であるので、この度の御經驗に就ても、詳しく承る機會を得た、ハルピン以後、その以北にも、以西にも、更に進んで見たいとの意圖を有してゐたけれど、それは出来なかつた。遙に露領の有様を想望して、種々のことを聞いた、何よりも諸種の重工業の發達を聞いて驚き、就中、その鋪裝道路の發達の有様を聞いて、且驚き、且羨んだ。滿洲に於る鋪裝道路は著しく進歩して居るけれど、シベリヤの重要都市を繋ぐ數千哩に互る延長の道路は、滿洲のそれよりも以上に、堅固に鋪裝され、確實に連絡せられて居るのであらうと思ふたのであつた。

私は、何よりも、我が國內に於る鋪裝道路の速設の必要を感じる。

## 二

我が國內には既に鋪裝された道路がどれだけあるかといへば、御送付を受けた、道路鋪裝の急務の示すところ、國道の延長八、三七一杆の中、九六二杆、即ちその一割二分に過ぎないとある、國道ですらさうである。まして、府縣道は更に其れ以下で、總延長一〇三、四九六杆の中、鋪裝の敷設されたものは、僅に二、二〇九杆、即ちその二分に過ぎないとある。

何といふ貧弱な現狀であらう、誰しもその不足に驚く、不備に驚く、緩漫に驚く、遲滞に驚く、そして、そ

れを聞き知つた者は、直に論鋒を政府に向けて、政府は何をして居るのだ、何をぐづくづして居るのだ、何うして、こんなに緩漫な、不足の状態に放任して居るのかと攻撃するであらう。

さりとて、私は、そんな攻撃を敢てする者ではない、實を申すと、こんなにまで、それがおかれてゐることを知らなかつた。地方に出かけるたびに、鋪装した道を疾走さして貰へるので、既にもつと多く鋪装されて居るものと思ふてゐた、以上の統計に依つて、今更の如く、その實情を知つてゐなかつた迂闊を知つて悔むたのである、これが一例とならう、私は、存外ものゝ皮相を見て、その眞相實情を知らずに居るらしい、それを知らないでも、知り得やうと勉めないうで居る者らしい。慚愧に堪へない。

それは別として、鋪道の建設に對する當局者の熱情である。國內の當局者のそれは、滿洲の當局者のそれに及ばない嫌ひがありはしないかと虞れる。滿洲には今も尙、鋪装されない道路が方々に在る。現に、私の往いた所に、そんな道路は幾ヶ所もあつた。自動車の車掌と共に乗客たる私の惱んだ道路は方々にあつたけれど、當局者は、近くそれを建設する計畫を立て、居た、立てつゝあつた、國內の當局者には、未だその案が無いのではあるまいか。

そして、滿洲に於ては、所謂軍用道路の線が、やゝ長くして遠い、そして、それは鋪装が既に出來て居る、それは、國內に於ても既に出來て居るものと察するが、但、滿洲は、ソ聯に對する直接の關係上、その急設の跡が目立ち、同時に思ひ切つて大膽に施設してあるので、その延長が、甚だ遠くして長い様に到るところに能く届いて居ると思つた。

別の話になるが、滿洲の人々は滿洲を手本として、日本本國を引き摺るのであると申す。その模範的施設を滿洲に施すのであると申すが、それか、あらぬか、滿洲の道路は能く出來、割合に、能く出來て居る。概觀的には、日本よりも能く行き互つて居ると言ひたい位に思つた。それは、例に依つて、私の輕斷過ぎた皮相の觀察かも知れない。

それが皮相の觀察であるか否やは、含き、私は、國內に於る鋪裝道路の延長の必要を、種々の角度から、急事と認める、時局の關係からも、急事と認める。

### 三、

時局の關係は、ガソリンの節約を急務の中の急務として居る。その理由は、何人にも分る。自動車に乗る者、自動車を駛らす者は、現に、その影響を祕つて、乗車賃は、二割も、三割も、四割も、高くなつて居る。乗客は、多分減じたであらう。私の如きは、電車に乗る場合が、近來ずんと多くなつた。

普通の道路にくらべ、鋪裝道路での、ガソリンを消費する量は、約二割位、少からうと、道路鋪裝の急務は、教へて下された、しかり、その節約は、二割程度である。二割の節約はいくらになるかといへば、一昨十一年の消費量に照して、約十四萬疋で、その價格は、一千九百萬圓だとある。それだけの節約になる。それだけでも、大切の費用だ。

それに加へて、道路維持費の節減がある。それも、亦大したことだ。貴會の御調査は、國道に於て一

料、一年當り二百五十圓以上となつて居り、府縣道に於て同百十圓以上となつて居る。尙、自動車の交通量の増加に伴ひ、節減額は、ますます増大する譯で、それが三百圓となり、四百圓になり、國道に於て百五十圓となり、二百圓となる(府縣道に於て)ことも、想望し得らるゝとある。

それらの利益に由つて、今日に要する建設費の支出は、多く憂ふるに當らないといふことにならう。それは心配に及ばない。早速、目に見える以上の如き利益に由つて取り返すことが出来るといふことになる。何をか躊躇せんや。私は、時局に必要なガソリン節約のため、先づ、舗道の建設を急げ、それが、ガソリン節約の大なる一要素であると切言したいのである。

池田藏相は幸に實利に明かな、實務に經驗の深い方である。決して目先きの勘定だけに逐はれ、一文惜みの百損じといふが如き愚を爲さるまい。既に必要な場合とあつて、棉花の輸入増加も認めてやられた。その如く、將來の利益のためには、今日の少許の支出は、必らず忍んで、奮發して、やらせて下さる筈、内務の當局者こそ一つ奮發して、その合力を求められては如何、陸海軍の方面も固よりそれに助力して下さるであらう。

私は、滿洲を見物する前、佛領西貢の方面を視た。そして、英領新嘉坡の方面をも視た。前段には、たゞ、滿洲方面の事のみを記したけれど、舗道の建設は、新嘉坡や、西貢の方面に於ても、つと整備して居る、充分に行届いて居る。私は、その邊の刺激をも受けてゐて、斯く叫び、斯く求めるのである。

附記 舗道に於るガソリン使用量の減は、砂利道にくらべ、約二割であらうと記したが、それは専門

家の調へである。素人の目の子勘定としては、私は、それをもつと多かり相に思ふてゐた。

と申す譯は、明治四十三四年のころ、本郷帝國大學前のところに、アスファルトや、木塊や、コンクリート等の道路を、試験的に、舗設したことがある。その際、私は、一人力車に乗つて、その舗設道路の上を通つた。中年の車夫であつたが、旦那、こんな有り難い道路はありません、些しも骨が折れませんか、車代をいたゞくのが勿體ない様に思ひますと語つてくれた。これは、彼が、自ら語つたのである。私から話かけたのでない。私は、その車夫の住所も名前も知らない。

私はこれを聞いて、非常に嬉しかつた。この舗設道路のためには、私は、激烈の非難と、批評とを受けてゐた、一車夫のこの迷懷に由り、百日の苦勞が一朝にして、酬ひられた様に、私は、感じ、その車夫に對し、つくづく、感謝に堪へなかつたのである。

車代をいたゞくは勿體ないといふ、たゞで乗せてもいゝといふ。そう感ずる程に、勞力が省けるものかと思つた。まして機械車に於てをや。それ故に、私は、二割どころか、それ以上、三割も、四割もの費用が省けるかも知れんと想つてゐたのである。

#### 四

この論の趣旨は、前段にて大凡盡きた。別に、絮説する必要はないことだけれど、尙北支旅行の際の所感の一節を、附け加へる。

北京と天津との間を繋ぐため、滿鐵社は、そこに百人乗のバスを運轉して居るといふことであつた。私はそれに乗つて見たいと思ひながらも果さず、たゞ百人乗のバスとはゑらいものだ、何事も北支が先きである。滿洲が先きである。日本は着々おくれて、滿洲に引き摺られ、北支に引き摺られるのだと、この時にも思ひ泛べたのであつた。

但、その天津から北京への通路は甚だ悪い――

評判の通州を経て――事變前にはそこは相當の道路となつてゐた。バスの通行にも耐え得てゐたのであるが、事變起つて以來、軍用トラツクなどが、夜も晝も、のべつ引つ切なしに疾走したので、道路が壞れて了つた。おまけに、猛烈の降雨で、打ち壞して了ひ、基礎が弛んだり、凹んだり、うねうねに、でこぼこになつて、バスの運轉には甚しく不便になつた。不利になつた。不自由になつた。

そこで、滿鐵は、滿鐵の負擔で、その間の道路を鋪設する。滿鐵なるかな。滿鐵だからこれは出来る。滿鐵でなくては到底出来ないことだと、讚嘆の聲を聞いたのであつた。

私は、それが既に鋪設されたか、何うかを知らぬ。しかしながら、儲かるから、滿鐵は、それを鋪設するものと思つた。そして、儲けるためには、それだけの資本を前以て投下することは、當り前の努力であると思つたのであつた。

それは北支のこと、前段のは、時局に關係した國內のことである。私は、國內の努力と設備は、當然に、北支以上であらねばならないと思つて居る。滿洲以上であらねばならないと思つて居る。そして

道路の改良建設に對する政府の責任は、當然に滿鐵以上であらねばならないと思つて居る。一國の政府のそれらに對する計畫と勇氣と決心とは、決して滿鐵會社以下であつてはならないと思つて居る。それ故に私は前段の如く鋪道の急設を促すのである。

それに幾何の資金を必要とするかを論ぜず、又その資金を何うして調達するかをも論じなかつたが、私は今日の日本の建て前から、それは、何んでもないことだと思つて居るのである。従前の日本は「金」を目標として豫算を作つたが、今日の日本は「物」を目標として豫算を作りつゝある。その意味は「金」は何うにでもなる。「物」がないから困るといふのである。言ひ換ゆれば、従前は「金」を調達するのにつたから「金」「金」と「金」を目標とする豫算を作つたが、今日は「物」を調達するに困るから「物」「物」と「物」を目標とする豫算を作ることになつたと申すのである。しかり、その様時代であるから、私は、資金のことを述ぶる必要を思はなかつたのである。

そして、その「物」といへば、「物」は道路である。道路に對する二三の材料を必要とする。改良を加へるのである。その「物」も「物」を動かす「人」も充分足りて居る。それに對して、政府はその「金」を調達すれば、事は、すらすらと運ぶ譯であるから、私は、この時こそ、政府が、鋪装道路改良道路を施設せらるゝに、最も、順別の時である。好機失ふべからざる時であると思ひ、本論を草したのである。

繰返すことになるが、ガソリンの消費を節約し、且、軍國の必要を充すため、切に、鋪装道路の急設を希望する。